

## 着陸は硬か軟か

(ハードランディング・ソフトランディング)

この国の中で、雇用保険を払っていない大集団がある。言うまでもなく公務員という名の労働者達である。何故雇用保険を払わないかと云えば、理由は単純で明快だ。失業することがなく雇用が保証されているからである。公序良俗に反しない限り公務員は定年まで勤められる。当然失業に対する保険的備えは要らない。だから職安などという組織とは無縁という訳だ。

何時つぶれるかも判らない中小企業的世界とは隔絶した「夢のような世界」にいる者達が、現在の日本と世界の経済状況をどのように見ているのかは興味深い。

私は、長年いわゆる大企業にいた。それもつぶれることなど全く考えないでよい企業であった。勤めている間、給料日に給料が振込まれない事などは一度も考えたことは無かった。そうした企業が揺らぎ出して6年が過ぎた。そして、倒れることなど全く想定していなかった企業の倒産が現実化して、失業の保険的備えのない労働者達(公務員)も自分の雇用が未来永劫守られると考えるのは、いかにも根拠の無い楽観的希望に過ぎないことが見え出してきた。

新首相は10年間で国家公務員を20%削減すると公約した。この変化の激しい時代にあって、10年などという「超」長期の期間を打出す神経は噴飯物であるが、それでも削減率の拡大を打出した。対立候補は、3年で50%と云った。どちらが世論の支持を受けたか知らないが、それでも失業しない筈の公務員も雇用が守られない時代が到来したことを示すメッセージとなった。そんなことは全く心配していない人種のようにも見えるが、打ち寄せる時代の波を止める防波堤は確実に低くなっている。

新蔵相は、金融危機の構造が明確に見え出した92年当時首相の地位にいた。そして当時暴落に近い下げを見せていた株式市場に対し「株は上がったりが下がり下がりするものだ」との名言を吐いた。だが92年8月に日経平均が1万4千円台に突入すると湧き上がる危機感を背景に、その名言を打ち捨て公的資金を株式市場に投入して買い支えに出た。所謂PKOのスタートである。その後折りに触れPKOが繰り出され、株式市場は機能喪

失状況に陥り大きな打撃を受けた。

また新蔵相は当時、既に破綻状況にあった住専を念頭に置いて、金融界に公的資金の投入をしなければ金融システム不安を解消出来ないと考えていた。そして当然であるがそれを口にした。だが政財界やマスコミの猛反発の前に、二度とそのことを云わなくなった。口を貝のように閉ざして、身の安泰を守ったのだろうか。しかし、本当に守ったものは何だったのか。昨年の拓銀・山一の破綻の伏線は92年にあったように思う。

そして今度、蔵相就任に際しての記者質問に対して「ハードランディングなら誰でも出来る」と云って、軟着陸(ソフトランディング)を目指すのが私の役目だと明言した。

この優秀で頭脳明晰な老蔵相は、本当にそう考えているのだろうか。それとも「老い」の影響が出ているのだろうか。

92年から現在に到るまで幾度となく露出した金融危機は「ハードランディングは誰も出来なかった」ことを表わしている。ハードランディングとは、物事を強制的に処理することである。出来るだけ多くの合意を取り付けながら平穩に物事の処理を進めるソフトランディングは、その名の通りソフトで一目尤ものように見える傾向がある。出来るだけ多くの合意を取り付けるというのもポイントだ。

しかし、それこそが「問題先送り」の構造ではなかったか。物事を強制的に処理すれば沢山の血が流れる。血の海を見るのは誰でも厭なものだ。だから本当は、ハードランディングは誰にも出来るのではなく、実行するのが極めて困難な処理手段だと云えるのではないか。そして、時代はソフトランディングを許さずハードランディングを求めているのだと思う。

私は、東京株式市場復活上昇の必要条件(十分条件ではない)は失業率の大幅上昇であると考えている。不謹慎だと云われかねないが、失業者の増大なしに経済の活性化は困難と思っている。試練は乗り越える為にやってくるのだ。

「預金者保護」「借手保護」「.....保護」、私達はもう保護とか保証とかそんな物と訣別しなければならぬ。もちろん大変だ。もちろん厳しい。しかし、その先にこそ光りはあると思う。